

弥生時代のブタの形質について

西 本 豊 弘

はじめに

- 1 形質を見るポイント
- 2 第1頸椎の特徴

3 歯の大きさ

- 4 その他

おわりに

論文要旨

弥生時代のブタの形質について、家畜化現象を見るポイントを説明した後、第1頸椎と上顎第3後臼歯の計測値を中心に検討した。まず、第1頸椎の形態では、朝日遺跡の資料によって、イノシシとブタを区別できることを示した。第1頸椎の上部は、イノシシでは高くなるのに対してブタでは低くなる。縄文時代や現代のイノシシの計測値を参考にすると、高さが長さの58%よりも高いものはイノシシで、それよりも低いものはブタと推定された。これは、ブタが餌を与えられるために、イノシシよりも首の筋肉を使う程度が低く、そのため首の筋肉の発達が弱くなり、それにしたがって骨の発達も悪くなるのではないかと思われる。この基準に従えば、朝日遺跡ではイノシシ類の15%がイノシシで85%がブタということになった。

次に上顎第3後臼歯では、縄文時代のイノシシに比べて弥生時代のイノシシ類では小さくなっていることが明らかとなった。この縮小の程度は、縄文時代以降のイノシシの縮小の程度と比べてみても大きい。気候変化や人口増加・狩猟圧などを含む島嶼化現象だけではなく、家畜化の影響が歯を小さくした大きな要因ではないかと推測された。その他の部位では、これまでにも述べているように、ブタでは頭蓋骨が高くなることを、下郡桑苗遺跡出土の資料で説明した。また、下顎骨では連合部と下顎骨底部の延長線の成す角度が、ブタではイノシシに比べて大きくなることを説明した。